

学校規模における実態調査について

1 調査対象
市内の小・中学校長

2 調査期間
令和6年4月24日から5月10日まで

3 調査内容
3つの視点、「学校教育の充実」・「児童・生徒にとって」・「教職員にとって」にて学校規模におけるメリット・デメリットを調査した。
なお、本調査における学校の規模は以下となる。

小規模校	小学校 11学級以下 中学校 8学級以下
中規模校	小学校 12学級以上24学級以下 中学校 9学級以上18学級以下
単学級校	小中学校ともに、単学級の学年が一学年でもあった学校

また、本調査の対象は通常学級とし、特別支援学級については考慮していない。

4 文部科学省が提示する一般的な小規模校等におけるメリット・デメリットについて（文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置に関する手引き」抜粋）

(1) 小規模校におけるメリット

- ・一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、補充指導や個別指導を含めたきめ細かな指導が行いやすい
- ・意見や感想を発表できる機会が多くなる
- ・様々な活動において、一人一人がリーダーを務める機会が多くなる
- ・複式学級においては、教師が複数の学年間を行き来する間、児童生徒が相互に学び合う活動を充実させることができる
- ・運動場や体育館、特別教室などが余裕をもって使える
- ・教材・教具などを一人一人に行き渡らせやすい。例えば、ICT機器や高価な機材でも比較的少ない支出で全員分の整備が可能である
- ・異年齢の学習活動を組みやすい、体験的な学習や校外学習を機動的に行うことができる
- ・地域の協力が得られやすいため、郷土の教育資源を最大限に生かした教育活動が展開しやすい
- ・児童生徒の家庭の状況、地域の教育環境などが把握しやすいため、保護者や地域と連携した効果的な生徒指導ができる

(2) 小規模校におけるデメリット

ア 学校運営上の課題

- ・クラス替えが全部又は一部の学年でできない
- ・クラス同士が切磋琢磨する教育活動ができない
- ・加配なしには、習熟度別指導などクラスの枠を超えた多様な指導形態がとりにくい

- ・クラブ活動や部活動の種類が限定される
 - ・運動会・文化祭・遠足・修学旅行等の集団活動・行事の教育効果が下がる男女比の偏りが生じやすい
 - ・上級生・下級生間のコミュニケーションが少なくなる、学習や進路選択の模範となる先輩の数が少なくなる
 - ・体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる
 - ・班活動やグループ分けに制約が生じる
 - ・協働的な学習で取り上げる課題に制約が生じる
 - ・教科等が得意な子供の考えにクラス全体が引っ張られがちとなる
 - ・生徒指導上課題がある子供の問題行動にクラス全体が大きく影響を受ける
 - ・児童生徒から多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる
 - ・教員と児童生徒との心理的な距離が近くなりすぎる
- 複式学級による課題（上記の課題に加えて）
- ・教員に特別な指導技術が求められる
 - ・複数学年分や複数教科分の教材研究・指導準備を行うこととなるため、教員の負担が大きい
 - ・単式学級の場合と異なる指導順となる場合、単式学級の学校への転出時等に未習事項が生じるおそれがある
 - ・実験・観察など長時間の直接指導が必要となる活動に制約が生じる
 - ・兄弟姉妹が同じ学級になり、指導上の制約を生ずる可能性がある

イ 教職員数が少なくなることによる課題

- ・経験年数、専門性、男女比等バランスのとれた教職員配置やそれらを生かした指導の充実が困難となる
- ・教員個人の力量への依存度が高まり、教育活動が人事異動に過度に左右されたり、教員数が毎年変動することにより、学校経営が不安定になったりする可能性がある
- ・児童生徒の良さが多面的に評価されにくくなる可能性がある、多様な価値観に触れさせることが困難となる
- ・ティーム・ティーチング、グループ別指導、習熟度別指導、専科指導等の多様な指導方法をとることが困難となる
- ・教職員一人当たりの校務負担や行事に関わる負担が重く、校内研修の時間が十分確保できない
- ・学年によって学級数や学級当たりの人数が大きく異なる場合、教員間に負担の大きな不均衡が生ずる
- ・平日の校外研修や他校で行われる研究協議会等に参加することが困難となる
- ・教員同士が切磋琢磨する環境を作りにくく、指導技術の相互伝達がなされにくい（学年会や教科会等が成立しない）
- ・学校が直面する様々な課題に組織的に対応することが困難な場合がある
- ・免許外指導の教科が生まれる可能性がある

- ・クラブ活動や部活動の指導者確保が困難となる

ウ 児童・生徒への影響

- ・集団の中で自己主張をしたり、他者を尊重する経験を積みにくく、社会性やコミュニケーション能力が身につけにくい
- ・児童生徒の人間関係や相互の評価が固定化しやすい
- ・協働的な学びの実現が困難となる
- ・教員それぞれの専門性を生かした教育を受けられない可能性がある
- ・切磋琢磨する環境の中で意欲や成長が引き出されにくい
- ・教員への依存心が強まる可能性がある
- ・進学等の際に大きな集団への適応に困難を来す可能性がある
- ・多様な物の見方や考え方、表現の仕方に触れることが難しい
- ・多様な活躍の機会がなく、多面的な評価の中で個性を伸ばすことが難しい

(3) 適正な学校規模によるメリット

- ・児童生徒同士の間関係や児童生徒と教員との人間関係に配慮した学級編制ができる
- ・児童生徒を多様な意見に触れさせることができる
- ・新たな人間関係を構築する力を身に付けさせることができる
- ・クラス替えを契機として児童生徒が意欲を新たにすることができる
- ・学級同士が切磋琢磨する環境を作ることができる
- ・学級の枠を超えた習熟度別指導や学年内での教員の役割分担による専科指導等の多様な指導形態をとることができる
- ・指導上課題のある児童生徒を各学級に分けることにより、きめ細かな指導が可能となる

5 調査結果について（ ●印については文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置に関する手引き」にあった例と同様の意見）

(1) 小規模校におけるメリット

ア 学校教育の充実の視点

- ・保護者と地域に「おらが村の学校」という意識が生まれやすい
- ・生徒の声を聴きやすく、意見や要望を教育活動に取り入れやすい
- ・校長の学校経営方針を浸透させやすく、学校の一体化が実現しやすい
- ・予算を柔軟に活用し、充実した教育環境を整えることができる
- ・学校行事や調査などがコンパクトでやりやすく、まとめやすい
- ・臨機応変の対応が取りやすい
- 児童生徒同士、児童生徒と教職員、保護者・地域と教職員の関係が密である
- 小規模だからこそ、地域や関係団体とつながりやすく充実した活動が展開できる
- 全校生徒の状況（居住地の地域性、家庭環境、兄弟関係等）を全ての職員が情報を共有、把握することができ、全教員で全校生徒の指導をすることができる

- 地域理解が容易にできる
- 学校行事や体験学習を企画運営する際、持続可能な適正実施への変更が組みやすいので、いろいろな取り組みをすることができる
- 校外学習等の受け入れ先が多く、安全面も手厚い支援ができる
- 校庭や体育館、特別教室等学校施設が余裕をもって使用できる

イ 児童・生徒にとっての視点

- ・ 全校児童がお互いに知り合いで仲良くなりやすく、仲の良い関係の維持もしやすいので、アットホームで安心できる空間で学ぶことができる
- ・ 先生との距離が近く、施設にゆとりのある空間が心地よい
- ・ 団結力が増す
- ・ 児童生徒と教職員との関係が近いため、分からないときに聞いたり、困ったときに相談したりしやすい
- 生徒一人一人に目が行き届くので、一人一人の生徒に適した対応をしてもらいやすい
- 行事での活躍の場面やリーダーシップを得る機会が多く、児童生徒一人一人が主体的になり、活躍の場が多い
- 体験学習等の一人当たりの体験量を充実させることができる
- 少人数のため、校外学習等の実施可能な選択肢が多い

ウ 教員にとっての視点

- ・ 緊急時対応における機動性、柔軟性がある
- ・ 教員集団の意思疎通がしやすい
- ・ 一斉指導に課題のある教員も、少人数の指導では大きな混乱を起こさず学級経営ができる
- ・ 自分の学級だけではなく学校全体という視点で教育活動を展開することができる
- ・ 活動によって、少人数から小集団等、編成人数を工夫することができる
- ・ 中心的な役割を若いうちから多く経験できる
- ・ 学年会等、学年で指導を揃える情報交換が少なく、学級事務に掛かる時間を少なくできる
- ・ 児童生徒に関する配布物、課題、成績等事務処理が少なく、児童生徒との時間の確保、教材研究や校務をする時間に充てることができる
- ・ (学級数にもよるが) 授業時数が少なく、教材研究や校務をする時間が確保できる(中学校)
- 教職員が一人一人の児童の特性や状況を理解することができ、個に応じた指導の実践や的確な学習評価が容易である
- 家庭環境や友達関係等より把握しやすく、早期に対応することができる

回答内で1学級の児童・生徒数により差があるという意見

- ・ クラスの人数が少ない小規模校であれば、メリットはあるが、単にクラス数が少ないだけでは特にメリットはない

- ・学級の児童・生徒数によって日々こなしていく事務量には大きな差がある

(2) 小規模校におけるデメリット

ア 学校教育の充実の視点

- ・児童・生徒同士、児童・生徒と教職員、保護者・地域と教職員の関係がこじれた時に回復が難しいことがある
- ・子供も大人も人間関係の広がりになく、健全な社会性が育つか疑問
- ・児童・生徒も教員も一人一人の割合が高いため、声の大きな意見に左右しやすく、良くも悪くも、一人一人の影響力が高くなる
- ・保護者の数も少ないためPTAを組織する際、引き受け手が少なく役員が苦慮することが多い
- ・児童・生徒の人数が少なくても、一人一人に寄り添った教育を行うには、教員数が足りない
- ・地域人材に限りがあり活用面の課題が大きい
- ・宿泊行事で引率する教員が少なくなり、生徒の安全確保が難しくなる
- ・教員数が少ないため、先輩教員のモデルに限られ、人材育成のバリエーションが狭まる
- ・関係者の人数に限りがあり運営に関する新たな視点や意見は生まれにくい
- ・配当予算が少なくなるので、備品等の購入で苦慮することがある
- ・児童・生徒数が少ないため、バス代等の交通費や卒業アルバムの代金は高額になってしまう
- 経験等バランスのとれた配置が実施しにくい。組織的な体制が組みにくい
- 切磋琢磨が少ない。生徒間で競うことができにくい
- 部活動が維持できない（先生が少ない）
- 教員数が限られるため、学年組織が固定化しやすい。また教員の異動が集中すると、体制作りに苦慮する
- 教職員の数も少ないことから、出張や休暇が重なった際に、補強体制に管理職まで駆り出される等、負担がかかる

イ 児童・生徒にとっての視点

- ・中学卒業後の進路先で様々なギャップを感じ自身の資質・能力を十分に発揮できなかったり、集団に馴染めるかどうかの不安がある
- ・人間関係づくりの経験が少ないため、卒業後に引きこもってしまうケースがあった
- ・人間関係が閉鎖的になる傾向があり、地域や家庭での関係性が影響することもある
- ・クラス替えをしても、人間関係を良好に保てない相手と一緒にいることがある
- ・委員会や係活動への参加に消極的な生徒は、これらの役が回ってくる機会が多いので苦痛に感じることもある

- ・教職員との関係が近いため、甘えてしまったり、困っていると支援が入るため、自分の力で何とかしなくてよくなる場合がある
- ・学力をはじめ平均化する傾向が強い
- ・校外学習や移動教室での貸し切りバス代金、アルバム代金等の一人あたりの単価が高くなる
- 集団が固定化されてしまうため、小さい時からの階級がそのまま続いてしまいやすく、一度関係が崩れる関係を修復するのが難しい
- 多様な意見や考えに触れる場面が乏しく、偏った考えになりがちになる
- 生徒たちが切磋琢磨し、成長していく機会を得にくく、競争意識が薄く、遅しさに欠ける
- 学校行事等集団の教育活動やグループ活動等に節制が生じることが多い
- 一定以上の人数を必要とする運動や学習、部活動ができない

ウ 教員にとっての視点

- ・教員も同様に刺激が少なく、安住しやすい傾向に陥る
- ・教職員間の人間関係等が閉鎖的になってしまう面もある
- ・生徒数が限られるため、リーダーになれる生徒の育成に苦慮していた
- ・人間関係が固定化しやすいので、いったん生徒間でトラブルが起こると解消に苦慮する
- ・トラブル等があった場合、クラスを変える等、環境を変える手段がなく、児童はすぐ仲よくなっても、保護者は後を引くケースがある
- ・クラス替えができない場合、児童の人間関係が固定され、過年度の学級経営の影響が残り、新たなやり方が浸透しにくい
- ・指導方法や子供、保護者との接し方などでこれまでの経験が生かせない場合がある
- ・専科教員と担任の週当たりの授業の持ちコマ数を平準化することが難しい
- 児童を見る教員が少なくなるので、多様な子供たちの良さを理解しにくくなる。子供に対する見方が固定化する可能性がある
- 校務分掌を複数掛け持ちしたり、出張や休暇の補教が分散できず、一人当たりの担当数が増える
- 社会が求める学校教育は小規模校、大規模校に関係のないものだから、教員一人一人に求める力量が大変高いものになる
- 多様な意見を出し合って、高め合う授業を構築する等、大人数を必要とする内容の行事や授業ができない
- 教員それぞれの専門性を生かした教育を受けられない可能性がある
- 教員の数が少ないため、相談する相手も少なく、先輩教員のモデルが限られ、人材育成のバリエーションが狭まる
- クラス替えの際、「つける」「離す」の選択肢が少なくなる
- （学級規模にもよるが）教科の教員が1人のことが多く、全学年全学級を担当することになるため授業時数が増える（ 中学校）

(3) 中規模校メリット

ア 学校教育の充実の視点

- ・ 大きすぎる集団に埋没することなく、個が活躍する場面も設定できる
- ・ 人材育成上、手本となる先輩を見つけやすくなる
- ・ 委員会や部活動数が多くなり、生徒に多くの選択肢を提供することができる
- ・ 教員、生徒が規模が丁度良く、クラス間を比較しやすく、刺激を受け、適正な競争意識が芽生える
- ・ 各会（教務、生活指導、研究、特活等）に学年から一人ずつ選出できることから、各会の情報を広げやすい
- ・ 副校長の勤務管理が比較的やりやすい
- ・ 専科授業の充実
- ・ 校外学習の行き先が複数ある（大規模だと限定される）
- ・ 行事や儀式等、大規模でないため活動しやすく、小規模でないことで一定の盛り上がりをつくりやすい
- ・ 「チーム学校」として学校が組織的に動ける一番良い大きさ
- ・ ゲストティーチャーなど直接体験を重視した活動をする際も、派遣費用などの一人当たりの費用が小規模校よりは少なく済む
- ・ バス代や卒業アルバムなどの費用が安くなる
- 教育活動行うのに活気があり、様々な取り組みを展開することができる
- クラス替えが行えるため、児童の構成と担任教員を同時に変化させることで、問題のある学級や学年の雰囲気をも刷新させられる
- 多様な考えがあることをみとめる気風を育むことができる
- 子供も大人もある程度の人数の中で広がりのある人との関係が展開され、一般的な社会性が育つ
- 教員の数が多くなるので、多彩な経験を生かした人事配置がしやすくなる

イ 児童・生徒にとっての視点

- ・ ある程度気の知れた仲間と過ごすことができる
- ・ 友達を選べる
- ・ 相対的な友達と自己との比較により、自己を客観的に、相対的に見る力を付けることができる
- ・ 学年で活動する場面が多くありクラスだけではない関係づくりもできる
- ・ 異年齢での取り組み（縦割り班）などでも班が適当な人数になるので、密な関係を作り、活躍する子も現れる
- ・ いろいろな教育活動で、リーダーシップ、フォロアーシップ、所属感等々、味わわせやすい
- ・ 学級意識ではなく、学年意識を育むのに適切な規模である
- ・ 部活動が多く、ゲームや運動、活動の際、ポジションなど、自分の興味・関心にあった部活動を体験できる
- ・ 運動などの際、インターバルがしっかりとれる

- ・学校行事や委員会活動に活気がでる
- ・一人あたりの児童の作業（当番活動等）が分担できる
- ・グループ学習が充実し、主体的な学習ができる
- ・教科担任制がやりやすいので児童にとって授業が充実する
- 児童・生徒の数、教員の数が多くなることで集団での経験を積むことができ、多様な関わりが期待できる
- 一部に人間関係がうまくいかない集団があっても、他の集団との関係を築きやすく、自分の居場所を見つける機会が多くなる
- クラス替え等で、リスタートが切りやすくなる
- 競争意識が高まり、意欲の向上が期待できる
- 運動会や合唱コンクールといった行事において、生徒たちが切磋琢磨し、成長していく機会が多い

ウ 教員にとっての視点

- ・先輩から学び、真似たり、相談することができる
- ・学級経営や学級集団作りなど、充実した特別活動ができる
- ・外部の研修に出やすい
- ・休暇は比較的とりやすい
- ・OJTが組織しやすく、先輩教員の負担も分散化できる
- ・教員の数がある程度確保されているため、いくつかの先輩教員のモデルが見られ、人材育成にバリエーションが生まれる
- ・校務分掌等は、1人あたりの事務作業が軽減でき、ある程度組織的に取り組むことができ、複数の目で確認できるのでミスは起きにくい
- ・何かトラブルが起きたときでも、学年（チーム）で連携・協力して対応することができる
- ・4クラスだと、わずかであるが、授業の持ち時数にゆとり（講師時数が発生する）が生まれる（中学校）
- 多様な意見を出し合う、児童主体の授業を展開しやすい
- クラス替えが出来るため、児童の人間関係が年度ごとに更新され学級の雰囲気が変わり、新担任のやり方が浸透しやすい

(4) 中規模校デメリット

ア 学校教育の充実の視点

- ・保護者や地域が「おらが村の学校」という意識を持てるか疑問
- ・人数が多いために、連携がとりにくく、連携（連絡調整）をとるために時間がかかること
- ・一人一人にかけられる時間や場は小規模校よりも少ない
- ・学校全体で揃って行動することは難しい
- ・学年で団結できにくい時は、学年全体が不安定になる
- ・特別な支援を要する児童への対応が難しい場合がある
- ・校外学習等で人数が多い関係で受け入れが困難な施設がある
- ・クラス替えへの配慮も2クラスだと限界がある
- ・教職員一人一人の成果と課題を把握しにくい
- ・専科教諭の人数が少ない

- ・学校経営方針等の徹底を図ることが難しくなり、課題意識等に温度差が生まれ、全校体制で臨むことに柔軟性を欠く
- ・管理する教職員が多くなることで、人事管理に掛かる事務作業量が増える
- ・教具や道具が多く、管理できないこともある
- ・物価高騰により教育活動を行うには、中規模校でも保護者負担が大きくなってしまい、教育活動の精選をしなくてはいけなくなっている

イ 児童・生徒にとっての視点

- ・集団に埋没してしまい、自己の考えや悩みを言い出し辛い状況になることがある
- ・様々な人間関係の中で疲れてしまったり、所属意識を持たず自分の殻に閉じこもる
- ・自閉的傾向のある児童にとって、大きな集団には馴染めないことがある
- ・友達と自己との比較により、自己肯定感を低くしてしまう児童がいる
- ・友達の中で、知らない子がいるとトラブルになることもある
- ・人数が多いために交流が深まらない
- ・児童・生徒、保護者のトラブルが多くなる場合がある
- ・2クラスしかない中、一度人間関係が崩れると、再構築が苦しい
- ・自分から取り組むことが苦手な生徒はそのまま何もせずに終わってしまうことがある
- ・一人ひとりにまで完全に教師からの目が行き届くとは言い難く、ケアが十分でない場面もあり得る
- ・児童・生徒一人一人に行き届きにくくなり学習状況を丁寧に見取ることが難しく、一人一人に適切な支援が提供されにくい
- ・家庭との連絡が丁寧にできない場合が生じる
- ・児童生徒一人当たりの活躍の場は少ない
- ・用具が少ない場合は、使える回数が少なくなったり、できないこともある

ウ 教員にとっての視点

- ・全校児童・生徒を全教職員が把握できる状況になく、顔と名前が一致させて、行動や状況を理解して指導・見守りをするのは難しい
- ・情報伝達や意思疎通が難しい場合があり、学年間で統一する必要があるが、しずらくなることで、課題意識にも温度差が生まれやすい
- ・教員間でのトラブルが起こる可能性は高まる
- ・若手教員の配置が多くなってきており、育成する人材の確保が難しい
- ・仕事量、補教が偏りやすい
- ・成績処理、面談、書類、保護者との連絡、対応が多い
- ・隔年での足並みをそろえることを意識するあまり、教員の個性的な実践等が阻害される

(5) 単学級校メリット

ア 学校教育の充実の視点

- ・ 児童・生徒と先生が親密な関係となることが多い
- ・ 保護者との連携はしやすい
- ・ 保護者のほとんどが卒業生で、学校への協力体制が充実している
- ・ 周知・徹底がしやすい
- ・ 学校全体での活動を柔軟に行いやすい
- ・ 規模の大きい学校より 教員の指導力が低くても、ある程度の学力（漢字・計算・読み）は定着が図れる
- ・ 個別の支援策を丁寧に計画できる
- ・ 教具は児童数、用意できるので、実験等の経験数は高まる
- ・ 行政が学校への支援を深く行い、学校の要望を最大限に取り入れてくれる
- ・ 施設の修繕や備品の購入など教育予算に手厚い

以下(1)-ア再掲

- ・ 全校児童・生徒の状況（居住地の地域性、家庭環境、兄弟関係等）を全ての教員が共有・把握でき、全教員で全児童を指導する体制が組める
- ・ 学校行事や体験学習を企画運営する際、持続可能な適正実施への変更が組みやすいので、いろいろな取り組みをすることができる
- ・ 校外学習等の受け入れ先が多く、安全面も手厚い支援ができる
- ・ 臨機応変の対応が取りやすい

イ 児童・生徒にとっての視点

- ・ 素朴で純粋な子供たちに育ち、教師との信頼関係が厚くなる
- ・ 先輩後輩の仲が良く、面倒見のよい先輩が多い
- ・ 異学年交流が日常的に行え、切磋琢磨することができる
- ・ 教師と子供との関わりが深く、一人一人の個性に応じた支援、教育を実施することができる
- ・ 先生から目をかけてもらえ、宿題をよく見てもらえたり、授業でわからないところをすぐ教えてもらえる
- ・ 体験活動やゲストティーチャーなどを招へいする際、全校または多学年で経験することができる
- ・ 朝礼や給食、避難訓練、身体計測等、自分の順番を待つ時間が少ない

以下(1)-イ再掲

- ・ 気心したメンバーでいられることに安心感を抱くことができる
- ・ 全校児童がお互いに知り合いで仲良くなりやすく、仲の良い関係の維持もしやすいので、アットホームで安心できる空間で学ぶことができる
- ・ 少人数のため、校外学習等の実施可能な選択肢が多い
- ・ 体験学習等の一人当たりの体験量を充実させることができる

ウ 教員にとっての視点

- ・コミュニケーションが取りやすい
- ・生徒に目が行き届きやすく、少人数なので、一人一人をきめ細やかに指導できる
- ・児童・生徒の安全や健康状態、人間関係を把握しやすい
- ・生徒の人数が少なくても、教員の配置は各教科配置され、欠員がない
- ・一斉指導に課題のある教員も、少人数の指導では大きな混乱を起こさず学級経営ができる
- ・中学校では、1年間で3学年分の指導ができるため、学力向上の施策を見通しをもって実行することができる
- ・生徒数が少ないので通知表も含め、作成・印刷、成績処理、家庭訪問等事務量が少ないので、教材研究や校務をする時間が確保できる
- ・施設・設備の利用時間等の調整が図りやすい

以下(1)-ウ再掲

- ・学年会等学年で指導を揃える情報交換の時間を取らなくてよい

(6) 単学級校デメリット

ア 学校教育の充実の視点

- ・学校行事等で行事数は同じだが、人数が少ないために実施に工夫が必要になる
- ・掃除や委員会など、振り分けができない。行事でも児童の係がないので、教師に負担がある
- ・移動教室、社会科見学、校外学習の計画、宿泊・交通手配、会計処理など、すべて担任だけで決めることが多い
- ・行事等での鑑賞の幅が限られる

以下(2)-イ再掲

- ・バス代や卒業アルバム等、費用が高くなる
- ・保護者の数も少ないためPTAを組織する際、引き受け手が少なく役員が苦慮することが多い
- ・教員数が限られるため、学年組織が固定化しやすい。また教員の異動が集中すると、体制作りに苦慮する
- ・専科教員と担任の週当たりの授業の持ちコマ数を平準化することが難しい
- ・教職員の数も少ないことから、出張や休暇が重なった際に、補強体制に管理職まで駆り出される
- ・配当予算が少なくなるので、備品等の購入で苦慮することがある

イ 児童・生徒にとっての視点

- ・人間関係が固定化しやすく、子供同士の人間関係で崩れると、自分を変えるきっかけを作りづらいため、その後も修復しにくく、後々まで影響する

- ・クラス替えがないことから、人間関係が固定化しうまくいけなくなつた際に、リスタートを切ることができない
- ・自分の意見を発言しても、比較が難しいため、考えの深まりが進まない
- ・競争意識が薄く、逞しさに欠ける
- ・一人でする活動も多く、くたびれたり、やりきれないこともある。
- ・いつも大人が側にいる環境になり、手を抜いたり、さぼったりすることができない
- ・部活動が少ない
- ・グループ活動や大人数での活動に制約ができる
- ・委員会や係活動への参加に消極的な生徒は、これらの役が回ってくる機会が多いので苦痛に感じることがある
- ・他校との合同行事だと、緊張度が高い

以下(2)-イ再掲

- ・人間関係が閉鎖的になる傾向があり、地域や家庭での関係性が影響することもある
- ・人間関係づくりの経験が少ないため、卒業後に引きこもってしまうケースがあった
- ・多様な意見や考えに触れる場面が乏しく、偏った考えになりがちになる

ウ 教員にとっての視点

- ・児童との関係、保護者との関係に疲れることがある
- ・少人数のため指導方法に工夫を要する
- ・教員の指導力が問われる。一人一人の責任が重い
- ・クラス替えがないので「離す」ことができない
- ・出張や休暇の補教が分散できず、一人当たりの担当数が増える
- ・校務分掌を複数掛け持ちするケースが多い
- ・若手教員にとっては、同じ学年の先輩から学び真似することができない

以下(2)-ウ再掲

- ・人間関係が固定化しやすいので、いったんトラブルが起こると解消に苦慮する
- ・生徒数が限られるため、リーダーになれる生徒の育成に苦慮していた
- ・クラス替えができない場合、児童の人間関係が固定され、過年度の学級経営の影響が残り、新たなやり方が浸透しにくい
- ・専科教員と担任の週当たりの授業の持ちコマ数を平準化することが難しい
- ・教科の教員が1人のため、全学年の全学級を担当することになる。そのため3学年分の授業の準備、定期考査の作成が必要になる。また、新規採用教員が配置された際、教科指導をできる教員がいない(授業が少ないので他校で学び機会を設けることがあった。)(中

学校)

- ・教科担任が1名のことが多く、教科に係る授業改善の研修等が充実しないことがある
- ・同じ指導案で授業を1回しか行えず、授業改善の機会が減ってしまう
- ・しなければいけない校務は中規模、大規模校とあまり変わらないため、一人でいくつもの担当をすることになる